



北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」

会報 かいほう / ノーフェンス

NO FENCE

やさしい気持ち、人の痛みを感じる気持ち、誰もが本来持っているそういうものとわたしたちは出会いたい。

創刊号

1

2008年8月

NO FENCE
(NO FENCE IN NORTH KOREA)

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 <http://nofence.netlive.ne.jp> 【郵便振替口座】 NO FENCE / 00180-1-707147



▶主な記事◀

- 虹の色 砂川昌順…1
- NO FRNCE 発足発表会 証言者8人ほか…2
- 映画『クロッシング』、日本初の試写会 3
- [北朝鮮強制収容所の基礎知識] <1> 小川晴久…4
- 共産主義全体主義と強制収容所(その1)小沼堅司…5
- 強制収容所の状況証言 千葉優美子…6
- 虹色作品募集 8

虹の色

共同代表 砂川昌順

NO FENCEでお勧めの『クロッシング』という映画では、にわか雨(ソナギ)が象徴的に描かれている。

そのシーンに「日本に住むようになって雨が大好きになった。だって日本の雨は綺麗だから」という韓国人の友だちの言葉を思い出した。その理由を問うと、「わたしの国の雨は、バケツをひっくり返したようにバシバシバシ。でも、日本の雨粒は細かくて、頬も優しく濡れるから。」と微笑んだ。それぞれの国や地域により、雨をさまざまに表現する繊細な感性は生まれてくることを教わった気がした。

日本では、“にわか雨”は“しゅう雨(う)”、“はく雨(う)”、“し雨(う)”なども表現する。“外持雨”あるいは“帆待雨(ほまちあめ)”とも言ったりする。さらには“私雨(わたくしあめ)”や“村雨”、地域によっては“肘傘雨(ひしがさあめ)”なども。微妙な違いはあるが、全部が“にわか雨”に類する。雨の言葉だけでも、きりが無いほど数多く存在する。

ところで、その“にわか雨”などの後に現れる虹は何色なのだろうか。七色なのか、数え切れないくらいあるのか。現代の日本や韓国では、常識的には七色とされているが、国によって(文化や時代によって)、二色や五色だったりする。七色が絶対的事実でないことを理解しておかないと、五色だと主張する国の人たちを理解することができなくなるばかりではなく、国によって虹の色が違つかと惑い、虹そのものの姿をとらえきれなくなってしまう。

虹が二色か七色、あるいは八色かを論じるより、論じる人の世界観や虹そのものを冷静に分析することが必要なのであろう。真の姿を把握した上で、虹の色を論じたものである。

北朝鮮強制収容所をなくすアクションの会

NO FENCE

NO FENCE in NORTH KOREA



＝強制収容所廃絶のために活動する会、日本で発足！＝

NO FENCE

＝発足会のために韓国から12名が来日。
強制収容所体験者等 8人の証言講演会を併催＝



(写真は、二枚を合成)

日本初の“北朝鮮の強制収容所”問題に絞った市民活動団体、「NO FENCE」発足を記念する発表会が、4月13日東京の星陵会館で開催されました。

会は午前と午後とに分かれ、午前は「NO FENCE」発足の経緯や共同代表や常任世話人たちによる「当会の目指すものや、前向きな取り組み」についての意志表明が行われました。

砂川昌順共同代表は、民衆の運動として協力を求めるメッセージを発表。

小沢木理共同代表は、「解決のために武力を容認しない」ということなどを話しました。

また、日本で“北朝鮮の強制収容所”問題の会を立ち上げるということに、熱い期待を寄せていただいた、韓国でやはり当会同様の目的で既に具体的積極的な活動をされている「北朝鮮政治犯収容所解体運動本部」（別称：北朝鮮民主化運動本部）の代表キム・テジン（金泰振）氏からも、解体運動本部の活動や、抱えている課題などのお話を交え当会への期待を込めたご挨拶がありました。

午後は、同「解体運動本部」の会員でもある方々が、ご本人の体験をもとに証言されました。証言者にとっては、体験を話すことはいつも辛いし、できれば避けたいことに違いないと思います。実際、本人にとって深い傷である体験を何度も話させるのはほんとうに酷だと思ふことが度々あります。

証言や発言された方は、キム・テジン（金泰振）氏のほかに、アン・ミョン Chol（安明哲）氏（元政治犯完全統制区域勤務の立場にあった「北朝鮮絶望収容所」の著者）、シン・ドンヒ

ヨク（申東赫）氏（今年08年3月に、日本語訳で手記が出版された「強制収容所で生まれた僕は愛を知らない」の著者）、金 Chol ス氏（1歳3か月で収監され約20年近く収容されていた）、チョン・ガンイル氏、金ウン Chol 氏、ムンスク女史、カン・Chol ファン（姜哲煥）氏（「北朝鮮脱出」共著者）、キム・ヨンスン（金英順）女史の方々です。

午後の部後半では、「国際世論にどう問う？」と題して、キム・テジン氏、カン・Chol ファン氏、キム・ヨンスン女史を交えて、当会共同代表の砂川昌順の進行でパネルディスカッションが行われました。その話の中で、『北朝鮮の現体制にとって、一番恐いことは、「強制収容所」の問題を追及されることです。その問題から世界の目を遠ざけるためにも、北朝鮮は「核」の問題を利用しています。この「強制収容所」の査察を要求され、その存在と実態を白日に曝されることを最も恐れています。』『強制収容所は、北朝鮮の経済をかなりの部分で支えている重要な施設です。そこを解体せよと言われることは、北朝鮮存続に致命的なことになるのです。』といった趣旨の発言がありました。また、一方的に政治犯とし収容されるこの「強制収容所」が解体に向かい、その解体が実現されれば、一気に北朝鮮を取り巻く様々な人権侵害の問題等の解決が進むであろう、といった発言もありました。

最後に、宋 允復事務局長の呼びかけで、強制収容所を無くすために世界に向けて連帯し声をあげていこうと、参加された会場の全員が起立し、「NO FENCE！」を力強く唱和しました。

脱北者を描いた映画

「クロッシング」

2008年最高の話題作

NO FENCE主催で 日本初試写会



とができない現実。この映画は、今の北朝鮮のごくありふれた日常の断片を切り取ったにすぎません。

しかし、監督のキム・テギユンは、「政治的な映画だと誤解しないでほしい。人間の本质を見る映画でありたい」。主演のチャ・インピョは、「人間らしく生きるため、生命を守るために決断した人たちの物語だ。」と話しています。

NO FENCEの活動は、まさにこの監督の理念と共通のものがありました。

「現実を直視すること」「政治的理由を盾に無関心を装うことなく、人間としてあるがままを知ってほしい」という私たちNO FENCEの願いや考え方が、この映画製作の一番の目的と重なりました。

この上映会では、キム・テギユン監督の舞台挨拶があり、韓国での試写会で演奏したロックミュージシャンが自ら作曲し歌っている「クロッシング」へのイメージソングが、サービスとして流されました。大変心温まる感動的な歌声でした。

試写会で寄せられたアンケートには、「家族が引き裂かれていく悲しさ、辛さから心の痛みに耐えられない」という声が一番多くありました。

韓国映画「クロッシング」の日本初の試写会が、NO FENCEの主催で6月17日、東京牛込草薙区民センターで行われました。上映は平日の夜7時からで、企画から約2週間という短い準備期間で情報提供もままならない状況でしたが、想像以上に多くの方にお見え頂きました。

これに先駆け韓国では、5月26日にソウル蚕室スタジアム併設の室内競技場で、ロックコンサートと抱き合せて開催され、20代を中心に6000人も招待するという大規模な試写会をし、好評を得ていました。韓国では6月26日から一般公開されています。

この映画は、2002年3月、脱北者25人の北京在住スペイン大使館駆け込み事件をはじめ、脱北者たちの取材を続け、その実話を土台にして作られたものです。

4年間の製作期間の間、実際に脱北ルートを再現するために完全に秘密裏に撮影が行われ、韓国、中国、モンゴルの3か国間8千kmを行き来したといえます。広大に広がるゴビ砂漠の風景の美しさや厳しさも、圧倒的な臨場感で迫ります。

映画の中の若い父親は、いのちを繋ぐために、家族の命を守るために、家族を置いて国外に脱出しなければならませんでした。生きるためには、家族と離ればなれにならなければならなかった。生きるために家族はバラバラになり、幼子でもひとりで命を賭けて生きていかなければならない。人生のどこを切り取っても生きるには死線と隣り合わせ。家族の絆の維持すらままならない生活、人間としての尊厳を維持するこ

海外で最も関心の高い「クロッシング」、今現在進行している手つかずの北朝鮮の現実を、「よく映画に作ってくれた!」という熱い声が聞かれます。

一見敬遠されそうな題材にも関わらず、その重たい内容を鑑賞者に拒否反応を与えることなく重要なことを伝える監督の才能はさすがでした。

「クロッシング」の日本初上映が、ラッキーにもNO FENCEにとっても、4月13日の会の発足後、第一回目の活動となりました。

●その後、日本でも配給会社が決まりました。恐らく年内には一般公開される予定です。

この映画は、民が発信するいのちの叫びでもあり証言でもあります。映画史上でも特筆されるべき、非常に優れた貴重な作品です。

〔北朝鮮強制収容所の基礎知識〕 <1>

総論 巨悪と怒りの二重性

小川 晴久

この欄を担当することになりました。知識とえば、ホーム・ページや葉の“一問一答”に述べたことを、少し詳しく書くことになるような気がします。次回からそれに沿って個別に述べてまいります。初回は総論として北朝鮮収容所問題の本質について書くことにします。その本質は体験者の手記を読まないとはわかりません。

■何が許せないか

一、人の命を簡単に奪うこと

- (1) 反革命分子と烙印を押されただけで殺されること
裁判もなしに、反論権もなしに、公の前で訴える機会もなしに。
- (2) 反革命分子の血を引くと言うだけで死に追いやられること
三代にわたってその血を断てという金日成教示の実践。封建時代の残滓。本人は何の罪があるか分からないまま半殺しの毎日を体験させられる。

二、死への過程の陵辱のされ方

生きようとする人間の本能を悪用し、悪（保衛員）の前に跪かせ、陵辱（りょうじょく）する。人間を檻の中で飼育する。以上の二つは暴力の中で、直ちに銃殺するぞと言う恐怖の中で実行されていく。

■何故こんなことが許されているのか

・その最大の理由

隔離された世界（空間）の中であること
金日成・金正日は徹底的に、秘密裏にこれを行ってきた。各収容所は軍隊で厳重に警備されている。

・もう一つの理由

この事実（巨悪）が広く知られていないため1993年に世界で始めて収容所で10年生き延びた体験者の手記が公刊され、今日まで15年が経つのに何故収容所はなくなるらないのか。

この理由はいくつも考えられる。

- (1) 余りにその内容が残酷であるため、また人は不幸を見たくないため、その手記が鼠算式に普及しないこと
- (2) 北朝鮮を社会主義の国と考える人たちは、このようなことがあることを想像できず、手記を読もうともしないこと
- (3) 戦前の日本による朝鮮支配の負の遺産を考え、北朝鮮バッシングになると考えて公共報道機関が特集を組んで、日常的に報道しないこと
- (4) 収容所の存在と実態を知らせる私たち人権団体の運動の弱さもある

■二重の怒り

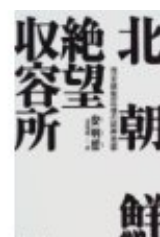
体験者の手記を読んで湧き上がる怒りと、この巨悪がなかなか知られず、放置されていることの怒りの、二重の怒りに私は駆られます。早く収容所をなくさないと、この二重の怒りのため、私たちの情緒（じょうちょ）がおかしくなり、私など品性が段々荒（すさ）んだものになってきています。怒りっぽくなってきています。知らないていることの犯罪と、知ってしまったものの心の荒（すさ）み。皆さん、どうしたらよいでしょうか。

この矛盾を解決するには、体験者の手記を地道に友人・知人に広めていくしかない私は、今考えています。15年この運動に関わってきたものの悲しい教訓です。

収容所という巨悪がなくなることを、つい人のせいにしてがちになっている自分をよく見ます。わたしにも他にやりたいことが一杯あるからです。しかし、人のせいにするのは敗北ですね。二重の怒りを一重の怒りに戻す努力をしながら、そのためにNO FENCEが誕生したのだと、心に言い聞かせ、手記を広めることに努めたいと思います。皆さん、よろしくお願いします。

■北朝鮮強制収容所参考文献

- ・姜哲煥・安赫共著『北朝鮮脱出』上下
(池田菊敏訳、文春文庫。単行本は1994年)
- ・姜哲煥著『平壤の水槽』北朝鮮地獄の強制収容所
(裴淵広訳、ポプラ社 2003年)
- ・安明哲著『北朝鮮絶望収容所』
(池田菊敏訳、ワニ文庫、KKベストセラーズ、単行本は1997年)
- ・申東赫著『収容所に生まれた僕は愛を知らない』
(李洋秀訳、KKベストセラーズ 2008年)



共産主義全体主義と強制収容所 (その1)

ジョン・ドゥンヒョク

——申東赫著

『収容所に生まれた僕は 愛を知らない』を読む——

小沼堅司



■本書の著者、申東赫氏は1982年、北朝鮮の「价川14号管理所」（一度収容されたら生きて出ることができない「完全統制区域」収容所）で生まれた。父は、兄弟が朝鮮戦争後に韓国に逃れたという理由で、1965年に、家族全員とともに逮捕・収容された。当時進められた「成分調査」に引っかかったためである。（地下監獄で指紋を強要されたある文書に「越南」と書かれていた。）母については何も知らない。申氏が生まれたのは、「表彰結婚」による。この制度は、収容所の「労働力の増産」のためと、危険な仕事や密告に対する報酬として、5日間の夜を過ごすことを認めるといものである。「家族」として生活することはできない。金正日の誕生日など年に数回行われるという。結婚と家族という人間にとってもっとも大切な人生経験を、収容者をおとなしくさせ、意識を麻痺させるために性的本能を利用する卑劣な制度である。

■本書は、奇跡的に脱出に成功したために可能となったのであるが、囚人の側から「完全統制区域」の生活を書いた唯一の報告である。そこには過酷な強制労働とその犠牲者、秘密監獄での拷問、母と兄の公開処刑、学校生活（「人民学校」5年と「高等中学校」6年）、食糧事情など強制収容所の生活や囚人工場としての収容所の経済的機能（各種工場・鉱山）などについて書かれている。

「全体主義体制はメシア的王国ではなく、死の強制収容所においてこそその真の姿を現す」（H・アレント）とすれば、本書での報告は北朝鮮全体主義支配体制を理解するのにきわめて重要である。（注、メシア：救世主の意。唯一絶対のマルクス主義の教義による世界と人民の最終的救済を約束する。）

しかし、ここでは紙数が限られているので一つの点だけを指摘したい。「全体主義権力と言語」という問題である。本書の巻末に「申東赫が知らなかった言葉」の一覧が載っている。ほんの一例でしかないそうであるが、「愛情や関心を表す言葉」、「喜びや悲しみを表す言葉」、「怒りや立腹を表す言葉」などである。

■ここで思い出すのが、スターリン全体主義独裁制を告発した20世紀最大の政治小説といわれるG・オーウェルの『1984年』における自由社会の言語の破壊である。「新語法（ニュー・スピーク）」と名づけられた言語コード（A語彙群・B語彙群と

言葉・語彙が抹殺され、コミュニケーションの枠（コンテキスト）が恣意的に決められている。

（注：言語コードとは記号論の用語で、言語の辞書的意味と文法を指す。）

「新語法の目的は思想の範囲を縮小すること」であり、「正統とは何も考えないこと——考える必要をなくすること」である。この精神管理のテクノロジーは、独立の思想の可能性を根絶するだけでなく、普通の人間的感情を圧殺し、人間性を体系的に破壊しようとする。小説の主人公を異端審問にかけられる権力の司祭・オブライエンは、「人間を意のままにできる力が権力だ」、「君は人間性というようなものがあって、それがわれわれのやり方に反発し、反逆するだろうと思っている。しかしわれわれは人間性まで創造しているのだよ」という。全体主義権力は「汝、斯(か)くすべからず」だけでなく、また「汝、斯くすべし」と命ずるだけでなく、「汝、斯くなり」を要求するのである。つまり、外的行動の禁止あるいは命令だけではなく、内面の意識や感情までも改造して「新しい人間」を創造しようとするのである。

■このように共産主義全体主義権力は、一方では監視・処罰・投獄・処刑、密告・相互密告によって、他方では言語統制による人々の考えと意識の管理によって、〈万世一党〉の〈権力恒久再生産〉を目指すのである。北朝鮮の収容所、とりわけ「完全統制区域」では、囚人（政治犯とその親族）を社会から隔離して根絶やしにすることを目的にしているから、強制労働・拷問・飢餓状況・密告・公開処刑などによって、コストをかけずに囚人労働を極限まで利用・搾取して、最後に利用価値のなくなった者の死体を穴の中に埋めることになる。「人民学校」と「高等中学校」での教育もその観点から施される。

■申氏は、社会に戻すことを予定していないから、収容所では思想教育（「唯一思想体系」や金父子崇拜、反米・反日教育など）は行われなかったと証言している。〈人間改造〉ではなく〈根絶〉を最終目標にしているからである。それにもにもかかわらず、全体主義権力の縮図として「完全統制区域」収容所では奴隷労働の管理のためにも、限定された言語による意識と考えの管理（縮小）を行う。「表彰結婚」によって再生産した囚人労働の利用・搾取のためにも、それは有効なのである。訳者（李洋秀氏）の注記によれば、申東赫氏が豊富にもっていた語彙は工作や農作業、炭鉱や土木関係の用語であったという。

■申氏も収容所内で、収容者自ら「罪を犯した自分は、ここの規則に従うのが当然で、一生、命令されるままにおとなしく暮らすものと考えている。そもそも抵抗意識などないのだ。私もそう思い込んで暮らしていた。（中略）収容所の徹底的に統制された環境が、そう考えるようにさせているのだ」と述べている。まさに「汝、斯(か)くなり」である。

■その申氏は、収容所の根本規則「管理所の十大法と規定」を今でもよどみなく暗証できるほど徹底的に叩き込まれたという。この規定の特徴は、「保衛指導員に絶対服従しなければならない」（第4）のように「……ねばならない」という命令の規定のほかに、「逃走はできない」（第1）、「3人以上集まれない」（第2）などのように「……できない」と書かれていることである。まさに「命令されるままにおとなしく暮らす」のである。

■最後に、申東赫氏の手記のなかの注目すべきことを指摘してこの紹介を終えたいと思う。

G・オーウェルがいうように、人間関係を破壊しつくす『1984年』の世界では、「感情の尊厳とか深い悲しみ」といった細やかな感受性が消失するが、申氏も強制収容所で母と兄が公開処刑されたときにも、なんの感情も起こらなかったと述べている。これは、「愛情」や「悲しみ」、「怒り」を表す言葉を知らなかったという証言に対応する。

こうして全体主義権力の言語コードとコンテキストは、拷問・公開処刑・相互密告などテロル装置とあいまって、怒りや抵抗の感情を消去しようとするのである。

【日本人や在日朝鮮人たちと強制収容所の状況証言】



千葉優美子

幼い頃両親と共に帰国事業で北朝鮮に渡り、37年間北朝鮮での生活後脱北。2005年に日本に帰国された千葉優美子さんが、収容所の解体と生存者の救出を希求すると共に、「帰国事業で北朝鮮に渡った日本人や在日朝鮮人たちが強制収容所に収監されていた」という状況証言をNO FENCEに送っていただきました。千葉さんは4月13日の発会式に大阪から参加され、当会に入会されました。

<ホームページにも掲載されています。>



私は大阪で暮らしている脱北者千葉優美子と申します。以下の一文から私の心を読んで下さったら、ありがたいです。

私は日本でNO FENCEが発足したことを、熱烈に祝します。そして、心から感謝いたします。ありがとうございます。発足会に韓国脱北者たちも来られ、証言されたので、北朝鮮収容所の現実が、今少しよく理解されたのではないかと思います。

私は北朝鮮で暮らしながら、日本で生まれた私がどうして北朝鮮に来て、このような苦勞をしなければならないのか、嘆きつつ流した涙は、川ほどになります。今晚は無事か、明日は無事であるか？ いつ、どの瞬間に、収容所に引っ張られるかわからず、びくびくと送った日々を忘れることができません。

日本にある朝鮮総連という団体のペテンで、いわゆる“帰国”という名で北朝鮮に行った9万3千人以上の人たちの多くが、北朝鮮政治犯収容所へ引っ張られた方法は、「49号病院」から始まりました。

帰国船という「万景峰号」という船から降りずに、再び日本に送ってほしいという人々を見て、精神的異常が生じた人々であると、病院に行って治療を受けなければならないと、強制的に船から降ろさせた後（北朝鮮では精神異常者の治療病院を49号病院という）、49号病院に連れて行ったという

ことは、鉄窓の中に閉じ込め、どのようにしたのか言葉もできないようになり、自分の身体の中心を取ることもできないように（注：話をするのができないような状態になり、自分の体を維持して立っていることも難しく、動物のような四つんばい状態に）させてしまいました。ですから、北朝鮮最初の帰国者収容所は49号病院という名だけを借りた「人間動物園」でした。

しかし、そのような人々が増えていくや、1969年からは、それまで北朝鮮本土国民だけ収容させていた政治犯収容所の中に、49号病院の中で生き残っていた人間動物たちを、まず切り離して収容することを開始し、言葉もできないように作り上げ、中心を維持することすら出来ないようにさせていたことを中止し、収容所の中で労働奴隷に作り上げました。このように始まった日本人、在日朝鮮人たちが、北朝鮮本土人たちのいた政治犯収容所の一角に、新しい「部落」を作ってみると（本土人たちとの接触は、収容所の中でも禁止した）、労働力が不足するので、社会に背いた人々を1970年代10年間だけでも（当初帰った帰国者の）45%程度（注）政治犯収容所帰国者部落に引っ立てて収容しました。

引っ張られた理由は：日本を恋しがったこと、日本の歌を一度歌った、日本語を話した、家で日本語を書いた、……手当たり次第に、日本から持ってきた財産を没収し、政治犯収容所へ収容しました。本人だけではなく、（本人は大抵保衛部監房で殺す）、兄弟、親戚たちまで、収容所に引

っ張りました。

その中には日本人たちもいました。本当に何の罪もない人々が、収容所に引っ張られ、どれだけ多くの人が死んだかわかりません。このように日本にある朝鮮総連という団体は、地上楽園に行こうとだまし、生き地獄に送ったのです。このような悪魔のような団体がなかったら、彼らが人々をだますことがなかったら、北朝鮮の政治犯収容所という恐ろしい所にまで行って死ぬことはなかったのです。ところでそのような朝鮮総連が21世紀である今でも日本に存在していることは理解できず、私は死んでも許すことはできません。私はこのような現実を日本の国民たちと世界が知らなければならぬと考えます。

今こそ現実をより具体的に知らせ、必ず(収容所を)解体させなければならず、生きている生存者たちは必ず助け出し、歴史の証言者として、二度とこのようなことがないようにしなければならぬでしょう。

私は今回発足したNO FENCEが、北朝鮮収容所にいる日本人、在日朝鮮人たちを必ず救い出して下さるであろうことを、固く信じたいです。否、固く信じます。万一、NO FENCEの集会で、37年間北朝鮮で生きた私の証言が必要でしたら、いつでも呼んで下さい。そして会員として私が出来ることを教えて下さい。何でもいたします。そして1人でも多く生きて日本に帰ってこられるよう、私の小さな力ですが、みな捧げ、最善を尽くします。助けてください。

NO FENCEの今後の成果を願っています。

2008年4月15日 千葉 優美子

千葉さんは、その後の2008年6月13日、在日本朝鮮人総聯合会に慰謝料請求の訴訟を大阪地方裁判所に提出しました。第一回公判は7月29日、その次の公判は9月30日を予定。訴状では、帰国事業が北朝鮮当局の主導で行なわれていた実態を明らかにしつつ、「原告の辿った過酷な体験を通し、帰国事業の犯罪性を裁判の場で明らかにし、今なお北朝鮮政府の人質政策に加担している被告の責任を追及するもの。」としています。<詳細は「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」ホームページ参照>

(注) 45%の根拠

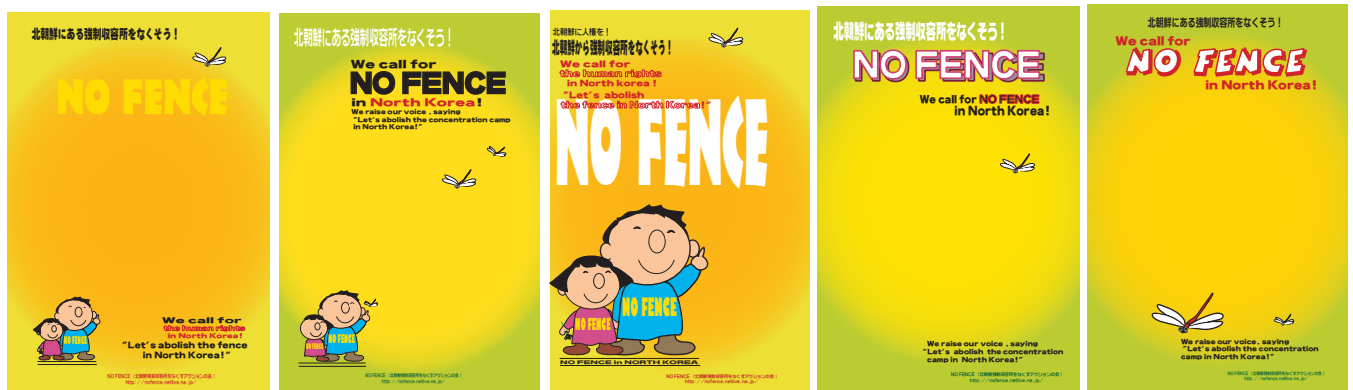
「北朝鮮に日本から渡った人々のうち政治犯収容所に行った人が40%だ」という話は、私が大学生のときの1979年だったと思います。その時(1979年12月)「歌舞団」という劇場で、「帰国実現20周年行事」がありました。この行事で道党幹部が報告をしたのですが、その報告の最後に帰国者たちの課業という言葉を使いながら、道党執行委員会の発表によれば、今帰国者たちの40%程度が革命化をしなければならぬようになったと言いつつ、これは帰国者たちがいまだに安逸で気の緩んだ生活から抜け出せないでいるからだと言い、自分たちを徹底的に鍛錬して、これ以上革命化区域へ行かないようにしなければならぬと言いました。即ち、この指摘は北朝鮮で革命化区域という政治犯収容所に今帰国者たちの40%が入っているという話であります。

その日の夜、家に戻った父は、家族たちの前で、言葉一言、行い一つ、慎重にしなさいと言い、そのような所に行ったら二度と生きて戻れないから、くれぐれも言わざる、見ざる、聞かざるで生きよう、そう言った父の言葉を、今も私は忘れることができません。しかしその後の1980年代にも、私たちの周囲にいた帰国者たちが、一晩立つと家族全部がいなくなっていることがありましたので、直接聞いた40%に5%を足して、その程度ではないかと考えたのです。」

<千葉優美子さんのプロフィール>

1963年3歳で両親と北朝鮮に渡る。父は朝鮮総連の幹部であった。37年間北朝鮮で生活後脱北し、中国で数年間過ごした後、2005年に日本に帰国。

【絵はがき5枚セット(500円)、NO FENCEキャンペーングッズ作りしました。】



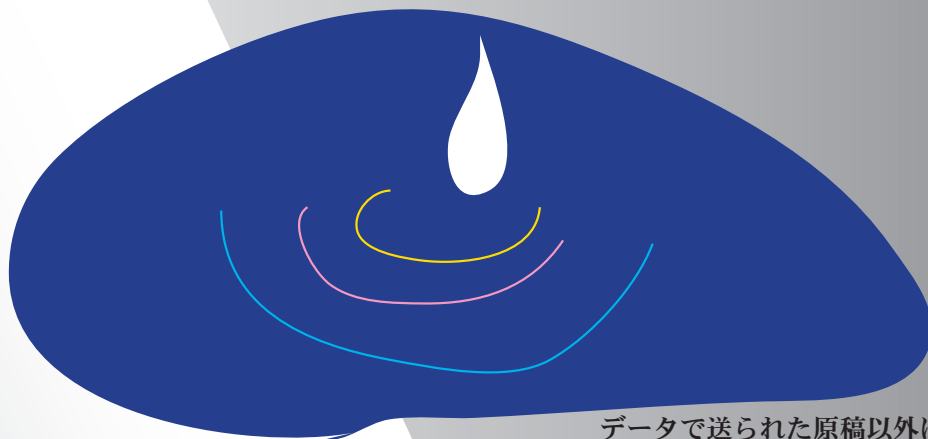
あ・な・たから湧き出す

虹色作品

大募集

待っています！

北朝鮮
強制収容所体験者の
「一冊の本」を読んで、
あなたの感想を一枚の絵に、
一遍の詩に、
ひとつの曲に、歌に
表現して作品に！！



データで送られた原稿以外は、
発表する場所が異なる場合があります。

全作品をホームページで発表。
人気の高かった各三作品には、
さらなる**特別発表の機会**を！

応募方法/ 詳しい応募方法の資料をご請求下さい。

応募先/ NO FENCE 事務局宛 (当会報の表紙を参照)

締切/ 随時受け付けています。毎年9月末までの応募作品から、10月に人気作品の発表
を行い、また応募者全作品の発表会を引き続き企画いたします。詳しくは資料を。



★応募作品については、物理的、その他やむを得ない理由があるときは、当会にその対応の判断をご一任願います。

「NOFENCE!」の声を広げるために皆様からの様々なご協力をお待ちしています。